

審査の結果の要旨

氏 名 岩松準

提出された学位請求論文「建設業の産業組織論的研究」は、建設業という産業分野とこれに属する建設企業を主な研究対象として、それらの実際の建設市場における振る舞い、その結果としての建設の市場環境や産業組織の適切な捉え方、建設業の非効率の実態を詳細に検討することを通じて、建設業の産業レベルでの生産性や効率性の向上に資する知見を得ることを目的とした論文で、全8章から成っている。

第1章「序論」では、研究の背景、目的、方法を明らかにしている。その中で、伝統的産業組織論が依拠する「S-C-Pパラダイム」に倣い、建設業の市場構造が市場行動を規定し、さらに市場行動が市場成果を規定するという一連の因果関係を想定したなかで、現代の建設業がおかれている状況を分析する方針を明らかにしている。

第2章及び第3章は、建設の「市場の構造」について統計データをもとに論じた部分である。まず、第2章「建設市場の統計分析」では、建設市場の特性と動向を把握するための記述を行っている。具体的には、日本の建設市場規模の国際的な特殊性と時系列的な変化の傾向を明らかにするとともに、産業組織論の成果を用いて、投資の内外循環として建設業と他産業との関わりに言及している。

第3章「建設業の産業組織」では、先ず企業数の多寡を時系列的な視点から分析した後、企業規模格差や集中度、重層構造など産業内の構造を明解に分析している。次いで、建設企業をかたちづくっている建設現場の組織に着目して、企業規模によるその格差の存在を指摘している。更に、建設労働者の推移や実態について、季節変動や年齢構成の変化などから建設労働者の推移や他産業と比較した際の特殊性を明らかにしている。

第4章及び第5章は、「市場の成果」について論じた部分である。まず、第4章「建設コストの内外価格差」では、建設物の内外価格差が話題となった経緯について説明した後、それは確かに存在するが、その主因が、製造業の生産性の高さに比べた際に建設業のそれが低いことに起因する「内々価格差」であると指摘している。次いで、

価格についての国際比較をする際の方法の原理に論及し、既存の方法を評価した後に、日米それぞれのコスト刊行物だけを利用した新たな内外価格差の計算・集計方法を提示している。

第5章「建設業の生産性」では、市場成果についてのもう一つの考察として、建設業の生産性について論じている。具体的には、産業レベルのマクロの生産性に焦点を当て、生産性に関する既存の指標の利用実態を検討し、指標間の定義に不統一があること等を指摘している。次いで、生産性測定のレベルを設定し、各種統計資料に基づきながら、それらレベル間の数値の大小関係を明らかにするとともに、建設業の労働生産性の国際比較を行っている。

第6章及び第7章は建設における「市場行動」を論じた部分である。まず、第6章「入札分析にみる競争」では、近年公表が進んでいる公共工事の入札結果データを収集し、欧米の入札研究で利用されている分析の方法論を援用しながら、日本における競争環境について統計的な観点より明らかにしている。具体的には、日本では相対的に入札値にばらつきが見られないこと、経営規模により競争上有利な工事規模が存在すること等を指摘している。また、競争入札の理論モデルに基づき、入札参加者数の大小が競争環境に与える影響を明らかにしている。

第7章「建設企業の入札戦略」では、入札における価格提示について、見積コストに一定の大きさのマークアップを加えるものとして捉える考え方を紹介し、日本での適用の可能性を見極めている。次いで、ダンピングや談合の問題について、歴史的な視点を入れて考察し、総合評価方式等を例とする入札制度の新しいデザインが重要であることを指摘している。

第8章では、以上の研究成果を総括し、結論としている。

以上、本論文は、伝統的な産業組織論の方法論と広範なデータ群の適切な収集、分析に基づき、「市場構造」、「市場行動」、「市場成果」という3つの側面から日本の建設業の特性を総合的に解明したものであり、建築学の発展に寄与するところが大きい。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。